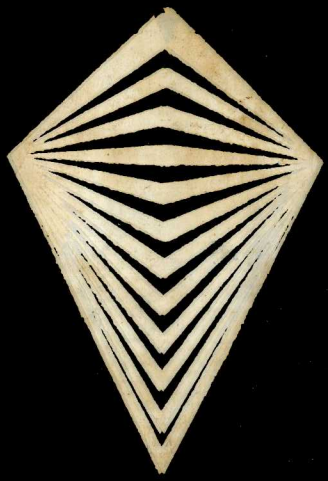


訳者紹介

平井呈一

1902年東京日本橋に生まる
早大英文科中退
「ナイン・テイラーズ」「小泉八雲作品集」
「怪奇小説全集」その他訳著多数

鮎川信夫（本名上村隆一）

1920年東京に生まる
早大英文科中退，入隊，スマトラ島から帰還
詩人，評論家
主要著書に「鮎川信夫詩集」，評論集「現代詩作法」等，
訳書クイーンの「Xの悲劇」「Yの悲劇」「Zの悲劇」，
ガードナーの「すねた娘」等

世界推理小説大系第19巻
クイーン　定価490円

昭和37年7月20日第1刷

著者　エラリー・クイーン
訳者　平井呈一
　　鮎川信夫
発行者　西村俊成
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町3－19
電話（941）3111
振替東京72732

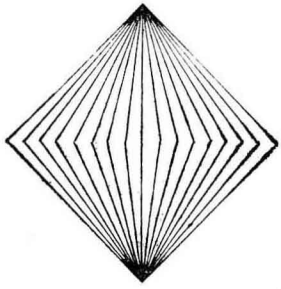
落丁本・乱丁本はおとりかえします

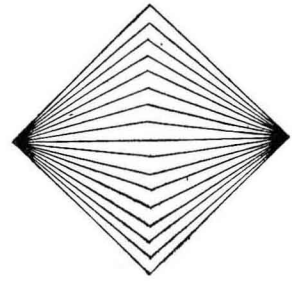
© T. Hirai　N. Aikawa

クイーン

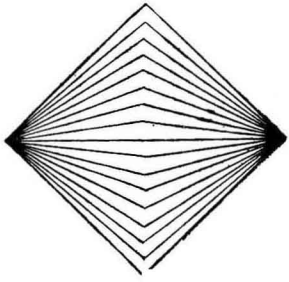
Yの悲劇 5
エジプト十字架の秘密191

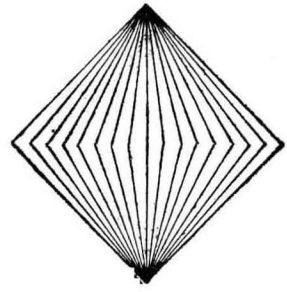
解説＝中島河太郎



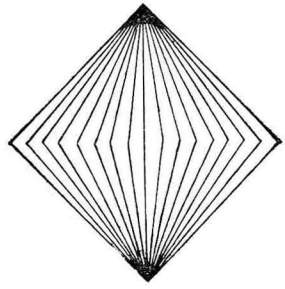


目次



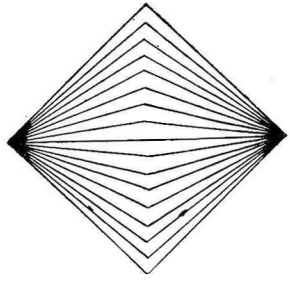


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



Yの悲劇

平井呈一訳



Yの悲劇

序幕

「芝居は晩餐によう似たもの……序幕はすなわち食前の祈りじゃ」

第一景　死体公示所

二月二日　午後九時三十分

この物語に関係のある二月のその午後、ぶきりょうで喧嘩っ早いブルドッグさながらの、深海トロール船ラビニア丸D号は、はるばる大西洋の長いうねりの沖合から、サンディー岬の鼻を泳ぎぬき、ハンコックの砲台に歯をむいて見せると、口に泡をふき、白い尻尾をまっすぐにしりえに引きながら、ニューヨーク湾の下手へと波を蹴たててつきすすんできた。おもわしい漁獲もなく、よごれた甲板はまるで屠殺場も同然、そのうえに、船は大西洋の荒い汐風にしたたか胃袋をもみぬかれたあとだったから、乗り組んでいる水夫たちは、いずれも船長を呪い、海を呪い、さかなも、鉛色の空も、はては左舷に見えるステイトン島の、青いものいっぽんはえていない蕭条とした浜べまでが、なにさま毒づいてやりたいほど、癪の種であった。酒のびんが手から手へとまわされていた。みんな波しぶきでずぶ濡れになった合羽の下で、ブル〳〵ふるえ上がっていたのである。

さきほどから欄干にもたれて、泡だつ青い波のうねりを、つまらなそうに眺めていた大柄な男が、その時とつぜん、全身を一時に固くすると、汐焼けのしたまっかな顔から目をむきだして、のどの奥から唸るような塩から声をあげた。水夫たちはいっせいに、その男の指さす方角にまなこをすえた。百ヤードばかりへだたったところに、なにか小さな黒っぽいものが、ぷかり〳〵、湾内に浮きただよっていた。どうやらそれは、まぎれもない人間の、しかもまぎれもない死体のようであった。

水夫たちはおどり上がった。「取り舵――！」と舵手が前こごみになって、どなった。

ラビニア丸D号は、たちまち、全身の継ぎ目をギイ〳〵きしませながら、不器用に左舷へグイと一つ大きく揺れながら、まわりだした。船は用心深い動物のように、獲物のまわりにまるい円を描きながら、すこしずつ、じわり〳〵と距離を狭めていった。景気づいた元気いっぱいな水夫たちは、その日の獲物のなかでのいちばんの変り種をせしめるのはここぞとばかり、躍起になって汐風に釣竿をふりまわした。

それから十五分ののち、くだんの獲物は、びしょぬれの甲板の上の、汐くさい水たまりのなかに横たわっていた。海水にふやけかえり、肉もところどころはがれ落ち、形骸もわからぬまでに崩れてはいるものの、とにかく人間であった。死体の損傷状態からみると、だいぶ何週間ものあいだ、深海の大桶のなかで洗われていたしろものらしい。水夫たちは、両手を腰にあてがい、両足を大股におっぴろげてつっ立ったまんま、みな黙りこんでいた。だれひとり、死体に手を触れるものもなかった。

*

こうして、さかなのにおいと、汐風のにおいを、息の通わなくなった鼻の穴に存分にかぎしめながら、ヨーク・ハッターは、死出の旅路に踏みだしたというわけであった。柩の台は、よごれくさった一艘のトロール船。棺かきは、さかなのこけらのこびりついた仕事着を着て、無精ひげをはやした荒くれた男ども。そうしてその鎮魂歌は、水夫たちがぼやく、やくたいもない雑言の声と、おりから海峡を吹きすさぶ汐風の音とであった。

やがてラビニア丸D号は、ぬれた鼻づらを泡だつ海水にプカリ〳〵ひたしながら、バタリー公園に近い、小さな荷揚げ場につながれた。沖

から、思いもよらないみやげ物を積んで帰ってきたというわけである。水夫たちがばた〳〵はねまわり、船長が持前のどうま声をはりあげると、港務所の役人たちは、おい来たとうなずいて、水だらけの船の甲板をちらりと眺めやった。やがて、小さなバタリー港務所の電話がジャン〳〵鳴りだした。そのあいだ、ヨーク・ハッターは、防水シートの下で静かにのびていた。

ほどなく、救急車が駆けつけてきた。白衣を着た人たちが、ボタ〳〵滴のたれる荷物を車に積みこんだ。これで死の行進は、ようやく海と縁が切れ、こんどは救急車のけたたましいサイレンの音が、代って挽歌の役をつとめた。こうして、ヨーク・ハッターは、ブロードウェイの南のはずれを通って、死体公示所へ運ばれたのである。

ぜんたい、この男は、ふしぎな運命をたどった男であった。その謎は、今もって解けずにいる。ちょうど、前の年の十二月二十一日のこと、クリスマスの四日前という日に、この男の老妻でエミリー・ハッターというものから、夫がニューヨーク市北ワシントン・スクェアの自宅から失踪したという届出が出ていた。その日の朝、かれはだれにも別れを告げずに、たったひとりで、赤煉瓦づくりのハッター家代々の邸宅を出たまま、行方知れずになったのである。

その後のこの老人の足どりは、かいもく、わからない。夫の失踪については、当のハッター老夫人にも、何の心当りもなかった。失踪人調査局では、よくある身のしろ金目あての誘拐で、どこかに監禁でもされているのだろうという説を出したが、しかしこの説は、その後架空の誘拐者から、富裕な老人の家族にあてて、何ひとつ連絡が来ていないことから、事実上、否認された。新聞は種々雑多な臆測をかかげたが、中にも、ある新聞のごときは、ハッター氏は殺害されたのだろうといった。ハッター家なら、どんなことが起ろうがいっこうに不思議はない、というのである。これに対して、ハッター家では、ヨーク・ハッターは人から攻撃をうけるような人間ではない。交友も少なく、いたって穏当な人物で、これまでにわかっているかぎりでは、およそ敵などはもっていないといって、この他殺説を頑強に否認した。また、べつのある新聞は、ハッター家一門の、世にも珍らしい、病的にきちがいじみたその閲歴について力説し、今回のハッター氏のばあいは、これは単純な家出である、――つまり、あの名だたるガミ〳〵屋の細君と、あの常軌を逸した、箸にも棒にもかからぬ子女たちと、あの片時たりともものびのびするいとまのない家庭生活からの逃避行である、という説を主張した。ところが、この逃避説も、当人の銀行預金にぜんぜん手のついていないことが、警察当局によって指摘されたことから、これまた同じように根拠の薄弱なものになってしまった。「犯罪のかげに女あり」という、苦しまぎれに唱えだされた最後の切札めいた臆説が、むなしく流産に終ったのも、やはり同じその理由からであった。この「蔭に女がある」という説には、ハッター老夫人がかん〳〵になって怒って、夫は本年六十七歳である、いまさら家庭や家族や財産を捨てて、そんな浮いた色じかけの鬼火などを追っかけまわす年齢ではないといって、まっこうからピシリときめつけたものである。

五週間にもわたる根気づよい捜査の結果、けっきょく警察側は、とどのつまり自殺説を打ち出したのである。そして、こんどこそは、どうやら警察側に白星があがったような形勢であった。

*

ニューヨーク警察本部、強力犯捜査課のサム警部は、このヨーク・ハッターの降って湧いたような突発的な葬儀には、まことにもって打ってつけの牧師であった。だいたい、この男は、なにもかもが大ぶりで、しかもなにもかもが不細工にできあがっている男である。鬼瓦みたいな頑固な面がまえ、ペシャンコにつぶれた鼻、ぶっちぎれたような耳、そして大きな図体に、大きな手足ときては、こいつ、ひと時代まえには、ヘビー級の拳闘選手だったんじゃないかとさえ思われるくらいで、木の瘤みたいにゴツゴツに節くれだったその拳は、長年犯罪をたたきのめしてきたせいか、まるで相が変っている。しらがまじりの赤っ毛頭に、灰色の眼、顔とき

たら砂岩みたいにザラ〳〵しており、一見してどしょっ骨のありそうな、頼りになりそうな感じをあたえる男である。頭にだって、けっこう脳ミソはつまっているし、いかにも警察官らしい、竹を割ったような一本気の正直者で、ながいこと、ひたすら犯罪相手の望みの薄い達引に、あたらこんにちまで碌々と年を食ってきた男なのである。

ところで、こんどのばあいは、事情がちがっていた。ことは失踪事件で、しかもその捜査がもたついている矢先へもってきて、さかなに食い荒らされた死体の発見ときたのである。死体確認の手がかりはじゅうぶんにある。万事がオープンで、公明である。ともあれ、一時は他殺説さえ出たくらいなのであるから、ここで一気に押して、なにがなんでも問題を解決してしまおう。それが自分の職務なのだと、警部はそんなふうな心持でいたのである。

ニューヨーク州の検屍医、ドクター・シリングが、目顔で相手に合図をすると、裸の死体は、解剖台から、車のついた移転テーブルの上に移された。ドイツ人らしいシリング医師の、ずんぐりむっくりした体が、大理石の流し台のまえにしばらくかがみこんでいたが、やがて洗った手を消毒すると、そのあとをきれいに拭きとった。太った小さなその手が、これでもうよいというまでに、すっかり乾ききったところで、シリング医師は、こんどはだいぶ使い古したらしい象牙の爪ようじをとりだすと、なにやら考えこむようすで、しきりと歯をせせりはじめた。サム警部はホッと安堵の息をついた。シリング医師の仕事が、ようやくこれで一段落ついたからである。いつもドクターが虫歯のうろをほじりだしたら、もう話をしかけてもいいことになっているのである。

二人は移動手術台のあとについて、公示所の死体安置室のほうへいっしょに歩いていった。どちらも無言である。ヨーク・ハッターの死体が、板台の上にドサリとおろされた。助手が、壁の入り込みのところへでも置きましょうかと目顔できくと、シリング医師は、黙って首を横にふった。

「どうです、先生？」

検屍医は爪ようじをしまって、「明白なケースだよ、サム。海に落ちて、まあ、そのあとすぐに死んだんだな。肺の状態でわかる」

「と、つまり、溺死というわけですな？」

「いや、溺死じゃないね。毒物死だ」

サム警部は、屍体台のほうを見やって、苦い顔をした。「じゃ、他殺ですね、先生。そうなると、われわれは間違ってたわけだな。あの遺書はニセだったのかもしれん」

シリング医師の小さな眼が、旧式な金縁めがねの奥でキラリと光った。しゃれたネズミ色の布製の帽子が、入道みたいな禿げ頭のてっぺんにちょこなんとのっかっている。「サム、きみも罪のない男だな。服毒必らずしも他殺とはかぎらんさ。……そう、青酸の痕跡は組織中にあるがね。じゃあ何だということになると、つまりだな、この男は、船の手すりにもたれながら青酸をのんで、それから海に落ちるか、飛びこむかしたのさ。いいかね君、海水だよ。それでも他殺といえるかね？　自殺だよ、サム、君のいう通りだったのさ」

警部は、ホッと愁眉をひらいた顔つきになって、「ほっ、こりゃすごいな！　そうすると、水に落ちたとほとんど同時に、死んだんですな。――青酸死ですな？　こりゃあ、しめたぞ！」

シリング医師は死体の台によりかかりながら、眠そうに目をしばたたいた。この人はいつだって眠そうなのである。「まあ、他殺とは考えられんね。惨劇のあとを語るような痕跡は、何もないものな。数カ所にわたって骨の損傷もあるし、肉に擦傷があるにしてもだ、塩水は防腐剤だからね。このくらいのことは、いかに分っちゃいない君だって、知ってるだろう？――きっとこの傷はだな、死体が海底で何かにぶつかってできた傷だよ。明らかに撃突だよ。おかげで、さかなどもはご馳走にありついたというわけさ」

「うふ。――そうね、顔の見分けがつかなくなってるのは、事実だからな」かたわらの椅子の上にのせてある死体の着衣は、ズタズタに引きちぎられて、ボロ屑同様になっていた。「だけど、どうしてもっと早くに発見されなかったんですかねえ？　五週間も死体が漂流している

なんて、まずないことでしょう？」

「そりゃあ簡単だよ。子供でもわかるこったよ。君たちゃ、どめくらだな！」検屍医はそういって、死体から剝ぎとったボロ〳〵の濡れた外套をつまみあげると、背中にあたる部分のところに、大きな裂け目があるのを指さして、

「この穴、これは君、さかなの齧った穴かね？冗談じゃないぜ！　この穴はね、なにか大きな尖った物でできた穴だぜ。つまりだな、死体は海底の沈木かなにかにひっかかっていたんだよ、サム。それが潮流のかげんか、あるいは何かほかの邪魔がはいったかして、やっとそれから離れて、そして浮き上がったというわけだ。おとといの時化のせいかもしれんな。べつに君、五週間見つからなくったって、なにも不思議はないだろうがね」

「そうするとですな、死体が発見された位置から考えてですよ」と警部は考えこみながら、「いちおう話の筋を通すのは、造作ありませんな。やつは毒をのんで、船から飛びこんだと。船はステイトン島の渡し船でしょう。そうして、海峡から外へプカリ〳〵流れでていったと。……死体の遺留品はどこでしたっけね？ちょっともう一度見ておきたいんですが……」

サムとシリングは、むこうに置いてあるテーブルのそばへ寄って行った。そのテーブルの上には、いろんな物品がのっている。正体の分らないまでにもみくちゃにちぎれた新聞紙、ブライヤーのパイプ、ぐしょぬれのマッチ箱、鍵束、海水で色のかわった紙幣入れ、銀貨銅貨とりまぜたひとつかみの小銭。そのそばには、死体の左手の薬指から抜きとった、印形のついた厚手の指環もおいてある。印形には、銀台でYHという頭文字が彫りこんであった。

しかし警部は、そのなかで、ただ一つの遺留品だけに関心をもっていた。それは刻みたばこ入れであった。たばこ入れは防水性のフイッシュスキン製であったから、中身のたばこは乾いていた。そのなかに、汐水に濡れずに一枚の紙きれが畳んで入れてあるのを、サムはもういちどひろげて見た。その紙きれには、不変色性のインクで、まるで活字でおしたようなきちんとしたきれいな文字で、なにか文句が書かれてあった。

文言はたった一行である。

関係者各位殿

小生は完全に正気の状態で自殺を決行する

一九――年十二月二十一日

ヨーク・ハッター

「簡明直截だね」とシリング医師がいった。

「大いにわが意をえたやつだよ。――おれは自殺する。頭は狂っちゃいない。これ以上何もいうことはないやね。まず一行小説というところだな、サム」

「もういいってこと。どなるよ、ほんとに」警部は悲鳴をあげた。「ほら〳〵、来ましたぜ。婆あ、おいでなすったよ。死体確認に来いといっておいたんです」サムは、死体の台の下においてあった、厚いシートを手早くつかむと、死体の上にそれをかぶせた。シリング医師はドイツ語で何やらモグ〳〵つぶやくと、目を光らしながら脇のほうへどいた。

一団の人々が、無言のまま、死体安置室へゾロ〳〵はいってきた。女一人に男三人である。なぜその女が先頭に立ってはいってきたのか、と怪しむ必要は、さらにない。どこから見ても、この女なら、いつだって人の先棒に立って手綱をにぎり、自分からしゃしゃり出て、采配をふるうにちがいない。そういった感じの女である。年齢はもういいころの婆さんで、年数がたって化石した木みたいに、コンコチに固くなっている。鼻ときたら、海賊の持っている手鉤みたいに尖って曲っていて、髪は白く、氷に浸けたような青い眼は、禿げ鷹の目みたいにまじろぎもしない。がっしりとした厚ぼったいその顎は、どんなに人から凹まされたって、びくりとも動くことはなさそうだ。……この女こそ、二世代にわたる新聞の読者に、ワシントン・スクェアの「億万長者」、「変りもの」、「業つくばりの鬼婆」などといわれてお馴染ふかい、エミリー・ハッター夫人その人であった。本年六十三歳になるが、年より十も老けて見える。ウッドロー・ウィルソンが大統領に就任した当時、すでに時代おくれだった衣裳を、いまもって後生大事に身につけている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

老夫人は、シートをかぶせた板台の上のもの以外には、目もくれなかった。入口からこの女が、しずくとはいってきたところは、まず、「審判」か「運命」の神のご降臨さながらというけしきであった。そのうしろに続いてはいってきた一人の男――背の高い、神経質らしい金髪の男で、顔だちがハッター夫人にそっくりなのに、サム警部は注目した――が、なにやら小声でたしなめたのを、老夫人は耳にも入れず、足もとめないで、そのままつかつかと板台のところまでいくと、いきなりシートをめくって、ズタくに見分けもつかなくなっている死体の顔を、例のまじろがない目でじっと見すえた。

サム警部は、彼女が勝手に非情な想念にひたるがままに任せておいて、横合から口を出さずに、黙ってそばに控えていた。ややしばらく、彼は夫人の顔を見まもっていたが、やがて彼女のまわりにうろちょろしている連中を観察するために、そのほうへ向き直った。さきほどの背の高い、神経質らしい金髪の男は、年のころ三十二、三歳で、これはヨーク夫妻のひとり息子のコンラッド・ハッターにちがいなかった。母親そっくりの、強欲らしい顔つきをしているが、同時にどこか線の弱いところがあって、さんざん道楽に身を持ちくずしたらしい、生活に疲れた暗い影のようなものが、どことはなしに窺われる。この男は、どうやら気分でも悪くなったらしい様子で、死体の顔にすばやい一瞥をくれると、すぐにその目を床の上に落として、右の靴の先で貧乏ゆすりをはじめだした。

そのそばに立っている二人の老人は、ヨーク・ハッターの失踪捜査を当初から担当した関係上、サム警部にはすでに見知りごしの顔であった。その一人は、ハッター家の主治医メリアム博士で、上背のあるしらが頭の、かれこれ七十に近い、痩せた撫で肩のご老体である。職業柄、博士は死体の顔を見ても、さらに動ずるけしきは見えなかったが、でもさすがに明るい面持ではなかった。故人と長年の交誼があったせいであろうと、サム警部は推察した。もう一人の連れの男は、これは見たところ、この連中のなかで一ばんお門違いの風采をした人物であった。骨ばってはいるが体つきのしゃんとした、なかなか芯のありそうな風貌をしている。元船長のトリヴェットという人で、ハッター家の古い友人であった。サム警部はこの老人を見たとたんに、思いがけない発見をして、われながらあっと驚かされた。前にはぜんぜん気がつかなかったことなので、それだけにそのことがひどく自分に後悔された。いま見るというと、トリヴェット船長の右足があるべきところに、水色のズボンの先から皮張りの義足がニュッとつき出ているのであった。船長は、なにか咽喉のおくに物でもつかえたのか、えらく大きな咳ばらいを一つした。

その船長が、横合からあまりな夫人の傍若無人ぶりをたしなめるように、汐風のしみこんだ腕をハッター夫人の腕のあたりにのばすと、老夫人は何と思ったか、いきなり筋ばった腕で邪慳にそれを払いのけたので、船長は顔をまっかにして、ひと足うしろへ下がった。

夫人は、その時はじめて死体から目を離して、「これなの……？　あたしには何とも言えないね、サム警部」

サムは外套のポケットから両手を出すと、咳払いをして、「いや、ごもっともです。だいぶひどくなっておりますからな。……では、こちらの遺留品の方を一つ見ていただきましょうか」

老夫人はけんもほろろにつんとうなずくと、サムのあとから、濡れた衣類のかさねてある椅子のそばへよっていきながら、はじめてその時感情らしいものをしぐさに現わした。ご馳走を食べたあとの猫みたいに、ペロリと赤い薄い唇を舌なめずりしたのである。メリアム博士は、黙って板台のまえの座を老夫人に譲ると、目顔でコンラッドとトリヴェットを脇へいざらせてから、死体のシートをめくり上げた。検屍医のシリング医師は、そのようすを、同業者らしい一物ありげな目ざしで、冷やかに眺めていた。

「この服はヨークのものだね。いなくなった日に、これを着ていたから」老夫人の声は、その口つきの通り、いやにつんけんとした切り口上だった。

「ところで、奥さん、こちらが遺留品なんですが」といって、警部は彼女をテーブルの前へつれていった。夫人は、さも気がなさそうに印形

のついた指環を手にとり上げながら、パイプだの、紙幣入れだの、鍵束だのに、ひとわたり冷やかな流し目をくれた。

「これもうちの人の物だね」とおよそそっけない調子で「この指環はあたしがうちの人にやった品だよ。……おや、これは何なの？」きゅうに胸騒ぎがしたようすで、例の遺書をひったくるように手にとりあげると、すばやく文面に目を走らせたが、たちまちまたもとの平静に戻って、まるで他人事のようにうなずきながら、「そう、これはヨークの筆蹟だね。まちがいないことよ」

言っているところへ、コンラッドがやり場に窮した目を、落ちつきなく、あれやこれやに移しながら歩み寄ってきた。さすがに彼も、故人の遺書には吐胸をつかれたらしく、内ポケットをそそくさまさぐると、何やら紙きれをとり出しながら、つぶやいた。「してみると、やっぱり自殺だったのか。そんな勇気があるとは思わなかったが。ばかなおやじめ……」

「あの、それは筆蹟の見本ですか？」とサム警部がふいに横合から口をはさんだ。この男、なんという訳もなく、きゅうにそのときむらむらと腹が立ってきたのである。

金髪のせがれは、手に持っていた紙きれをサムに渡した。サムはムッとした顔つきで、その紙きれに見入った。ハッター夫人は、もはや夫の死体にも遺留品にも目をくれようとせず、しきりと骨立った咽喉のあたりの毛皮の襟巻のぐあいを直していた。

「こりゃ同じ筆蹟だ、なるほど」と警部はうなるような声でいった。「よし、これがまず決め手だな」いいながら、彼は遺書と筆蹟見本を、両方ともいっしょにポケットにねじこんだ。死体の方を見やると、ちょうどメリアム博士がシートを元通りにかけ直しているところであった。「先生、あなたのご意見はいかがですか？本人の様子はよくご存じでおいでなんだから。この死体、まちがいなくヨーク・ハッターですかな？」

老博士は、サムの顔を見ないで、「ま、そうでしょう。そうですよ」

「年齢は六十をこえた男性で」とだしぬけに、シリング医師がいいだした。「手と足が小さくて、盲腸切開の古い痕跡がありますな。それから、たぶん胆石の切開もやってますな。六、七年前のものかな。どうです、符合しますか？」

「さよう、虫様突起は、十八年前にわたしが切除しました。もう一つのほうは胆嚢結石でしてね、これは重症ではなかったが、ジョンズ・ホプキンズ病院のロビンズ君が施術しました。……この死体はヨーク・ハッターに間違いありません」

そのとき老夫人がいった。「コンラッド、おまえ、さっそく葬儀の準備をおし。大げさにしないで。新聞広告は簡単に、花なんかいらないよ。すぐに支度にかかりなさい」いいすてると、彼女はもう入口のほうへ々さっさと歩きだした。トリヴェット船長がそわ〳〵した面持で、そのあとに続いた。コンラッドは、母親のいいつけを不承々々引き受けたような口ぶりで、なにかもぐ〳〵つぶやいた。

「ちょっと、奥さん」と警部が声をかけると、老夫人は立ち止まって、ジロリとふりかえった。「まあ、そうお急ぎにならんでもいいでしょう。――一体ご主人は、なんで自殺などなすったんですかね？」

「それはですね、今になって見ますと……」とコンラッドが蚊の鳴くような声でいいだすと、「コンラッド！」老夫人のひと声に、コンラッドは、叩かれた犬みたいにすご〳〵と引きさがった。彼女は踵を返してずいと戻ってくると、すっぱい息の香が嗅げるほど、サム警部の鼻の先すれ〳〵のところにピタリと立って、「何のご用？　うちの主人は自殺したんだから、事はそれでもうすんでいるんだろう？」棘のある、きっぱりした声音だった。

サム警部は面くらって、「いや、それはもちろん……」

「では、もうご用済みだね。あたしはね、おまえさん方から小うるさくつきまとわれるのは、二度ともうご免こうむりだよ」そういって、さも憎さげな最後の一瞥をくれると、そのままさっさと引きあげて行った。トリヴェット船長がホッとした様子で、義足をカタコト鳴らしながら出ていくあとから、コンラッドが胸でもむかつくのか、生唾をのみ〳〵あとに続いた。そ

のあとから、メリアム博士が痩せた肩をいっそう貧相にすぼめて、これも挨拶一ついわずにコソ〳〵出て行った。

「どうしたよ、おい」あとのドアが締まったところで、シリング医師がいった。「手も足も出なかったな」といってクス〳〵笑いながら、「しかし、何てえ女だい、ありゃあ！」あきれたようにいって、死体の台を壁の隅へぐいと押しやった。

サム警部は、万事お手上げといったかっこうで、「うーん」とひと声うなると、床を蹴立てるような荒々しい靴音をたてて、入口のほうへ出て行った。

部屋の外へ出ると、明るい目をした年若い男が、いきなりサムの太い腕をつかまえるや、肩を並べて歩きだした。「こんばんは、警部さん。どうです、景気は？　ハッターの死体が上がったそうですね？」

「勝手にしやがれ！」サムはどなりつけた。

「そうですよね」新聞記者は愉快そうにいった。「今そこで鬼婆のお出ましを見ましたよ。あの顎、すげえ顎だなあ！　まるでデンプシーそっくり。……ねえ警部、あんたがここへ来るからには、なにか訳ありなんでしょ？　わかってますよ。ねえ、何があったんです？」

「何もありゃせんよ。おい、この腕、離せったら。うるせえブン屋だなあ！」

「あいかわらず、おかんむりですね。……ねえ警部さん、殺しの線が出たんでしょ？」

サムは外套のポケットに両手をつっこむと、相手をグッとにらみつけて、「下らねえことほざくと、土性っ骨たたっ挫くぞ。君らペスト菌は、一体、どこまで食らいついたら気がすむんだ？　――ばか野郎、自殺だよ」

「でも警部さんは、たしか自殺否定説を……」

「うるせえな、こいつ。ちゃんと確認があったんだ。いい加減にずらからねえと、睾丸蹴上げるぞ」

死体公示所の正面階段を大股に駆け下りると、サム警部はタクシーを呼びとめた。若手の新聞記者は、ふと顔からニヤ〳〵笑いを消すと、もっともらしい顔をして警部のうしろ姿を見送った。

そこへ二番街のほうから、一人の男が、フウフウ息を切らしながら走ってきた。「おいジャック！」男は大きな声で呼んだ。「ハッター事件のニュース、何かあったかい？　鬼婆に会ったのか？」

サム警部に食い下がっていたほうの記者は、警部の車が遠ざかっていくのを見送りながら、肩をすくめて、「あったらしいな。鬼婆のほうは会ったけど、べつにネタはなかったぜ。とにかく、あとからあとから、いくらでも出てくる話だぜ、こいつは……」新聞記者は溜息をついて、「まあね、殺しだろうとなかろうと、これだけは言えるな。――きちがい一家、ハッター家様々とね！」

第二景　ハッター邸

四月十日　日曜日
午後二時三十分

きちがい一家のハッター家。……先年、ハッター家のニュースが世上を賑わしていたころ、ある文学者肌の新聞記者が、子どもの時分に読んだ「不思議な国のアリス」のことを思いだして、そんな名前をつけたことがあった。おそらくこれは、つぼをはずれた誇張だったであろう。ハッター家の人たちは、あの名作に出てくるハッターの半分も狂っちゃいないかわりには、あの億万分の一も陽気なところはなかったからだ。近年は、北ワシントン・スクェアあたりも年々さびれる一方であるが、あの近辺の連中が、寄るとさわると口にいいあっていたように、まことにこれは「始末に負えない」一家であった。そんなわけで、土地では草分けともいうべき古い家柄のくせに、いっこうに土地の風になじまず、いってみれば、グリニッチ・ヴィレジのご大家連中の縄張りから、いつもここの家は、一インチだけ外にはみだしていたのである。

問題のあだ名は根をおろし、しだいに大きくなっていった。一家のうちのだれかしらが、いつも新聞沙汰にのぼっていた。あるときはそれが、持ち前のだだら飲みで、闇酒場を一軒飲みつぶそうという魂胆の、金髪のコンラッドのば

あいもあったし、そうかと思うとまた、みずから率先して新ムードの乱痴気踊りの先棒になったり、文芸批評家連を招いて飲めや歌えの大盤振舞をしたりする、派手好みのバーバラのばあいもあった。かと思うと、三人きょうだいの末娘で、きりょうよしで尻の軽い、しじゅう鼻の穴をひく〳〵させて浮名を嗅ぎまわっている、ジルのばあいもあった。この末娘については、まえにも一度、阿片窟に入り浸っているという噂が、風のたよりにちょっと立ったこともあったし、週末をアディロンダックあたりで飲み明かしている、などという噂もちょい〳〵聞いたが、だいたいひと月おきぐらいに少し鳴りを鎮めているかと思うと、そのあとは、きまってどこかの金持の御曹子と「婚約」をしたという発表が出る。しかも、どこそこの子息と、ついぞ言わないところが意味深である。

このきょうだい達は、みんなそろいもそろって瓜二つ、生き写しのようによく似ていたかわりには、どれもこれも、そろって変り種であった。偏屈人で、大酒飲みで、無軌道で、どうにも先の見通しのつかない連中ばかりだったが、それでいてだれひとり、その名も高い母親の業績の上を行く者はなかった。この母親なるものは、げんざい自分の腹を痛めた末娘のジルさえ顔負けするほどの、無軌道な娘時代をすごしたのち、その昔のボルジアもかくやと思われるほどの、権勢当るべからざる、これに刃向かうことはとうていできない鉄筋女傑として、中年期にとびこんだ女である。この女の社会的辣腕にあまるような「景気の動き」は、何一つなかった。機をみるに敏、しかも持って生まれた火玉のごときその投機的なカンにかかっては、取引市場のどんな錯雑した危険な操作も、やすやすと彼女の手中にあった。彼女がウォール街の熱火で指に大火傷をしたとか、金持でしまつ屋のオランダ人の先祖から代々うけついできた莫大なその財産も、彼女の投機熱の業火でバタのようにとけて小さくなったとか、そんな噂がなんどかささやかれたけれども、正直のところ、だれひとり、彼女の顧問弁護士たちですら、彼女の資産の正確な額を知っているものはなかったのである。大戦後、ニューヨークに新聞のタブロイド判時代が到来したころには、彼女は「アメリカ一の女大尽」と呼ばれ通してきたが、もちろんこれはウソ記事であった。同時に、やはりそのころ、彼女がガラを食ってドン底に瀕していると中傷した新聞があったが、これもまた根からのウソ話であった。

以上を綜合すると、彼女の家族、その事業、背景、したたかなその経歴等々からいって、エミリー・ハッター老夫人は、じつに新聞人にとっては厄病神であると同時に、また福の神でもあったのである。新聞人が彼女をきらったのは、相手が骨の髄までいけ好かない妖婆だったからで、またかれらがこの妖婆を讃美したのは、ある大新聞の編集長がかつていったように、「ハッター夫人がいさえすれば、ネタがある」からであった。

ヨーク・ハッターがニューヨーク湾の凍えるような水にとびこむ以前から、あの男もいずれは自殺するだろうという予言が、すでに公然と流れていたのである。あの肉体――ヨーク・ハッターが身につけているような、ああいう真性な肉体では、とてもあれ以上はもちきれまいとは、世間のだれしもが言っていたことであった。かれこれ四十年に近いあいだ、彼はまるで猟犬のように鞭で打たれ、さながら駑馬のごとくに駆りたてられてきた男であった。たえまもない女房の毒舌の、降るような苛酷な笞の下で、いきおい彼は縮みあがり、自分の個性を失い、はじめは恐怖、つぎには自暴自棄、あげくの果てには絶望に、間がな隙がな、起きている間じゅう取りつかれている、いわば人間の抜け殻になり果ててしまったのであった。人並みの感性も知性もひと通りそなえた、ふつうの正常人である彼のような人間が、淫逸で、理不尽で、苛辣な、このきちがいじみた環境に、がんじがらめに縛られていたというところに、そもそも彼の悲劇があったわけである。

彼は、生涯、「エミリー・ハッターの夫」で通ってきた。――すくなくとも三十七年前、グリフィン（頭と翼がワシで、胴体がライオンのギリシア神話の怪獣。隠れた財宝を守るといわれる）が装飾の合言葉で、椅子蔽いがどこの客間にもなくてはならないアクセサリーだったころ、女の裾飾りがさかんにまだビラ〳〵していた大時代のニューヨークで、晴れて合巹の式を挙げて

以来、そうであった。はじめてたのしい蜜月の旅から、ワシントン・スクェアの邸――もちろんそれは女房の持ち家だった――へ帰ってきたその日から、ヨーク・ハッターはおのれの運命をさとったのである。その時分は彼もまだ年が若かったから、おそらく女房の圧制的な意志や、狂暴性、支配力などに奮然と挑戦もしたことだったろう。いっこくものの先夫トム・キャンピオンから、得体のわからぬ事情で離別された自分の身状をよく考えて見ろと、女房をたしなめたこともあったろうし、また、こんにち多少でも分別らしいものを身につけ、娘時代にニューヨーク中を呆れ返らせたような、あの無軌道ぶりが幾分なりとも影をひそめたのは、正直のはなし、だれあろう、みんな二度目の夫のこのおれのおかげではないかと、こんこんと言いきかせもしたことだったろう。でも、かりに彼がそういうことをしたとしたら、それこそとりも直さず、みずからの運命を封じこんだことになったのである。なぜというのに、自分の命令に逆らうものは、だれかれの会釈なく、断じて容赦しないエミリー・ハッターのことだから、他人の命令にやすやすと服するような女ではない。これが彼の運命に封印をはり、せっかく嘱望されていた前途を、あたら破滅させてしまったのである。

ヨーク・ハッターは、元来が化学者であった。若くして貧しい一介の青書生であったころから、他日かならず世を震駭せしむるに足る有能の学究者として嘱目されていた男である。結婚当時、彼はヴィクトリアン時代の化学界では夢想だもしなかった分野で、コロイドの実験をしていた。そのコロイドも、前途を嘱された出世の道も、はたまた名声も、すべては悪妻の烈火のごとき個性の攻撃のもとで、見る影もなく枯死してしまったのである。歳月はむなしく流れて、彼はしだいに陰気な気むずかしやになり、ついにはエミリーが、やるなら自分の部屋の隅っこでお遊びな、といって許してくれた、ほんの間に合わせづくりの貧弱な実験室で、せめてもの心ゆかせの仕事に向かうことで、わずかに心をやっていたありさまであった。そんなわけで、しぜん、金持の女房の恩恵にすがり、（しかもその事実を一々刻明に思い知らされながら）ただもう抜け殻同然のあわれな身の上となりさがり、女房の血をひく不出来な子供たちの父親としては、わが家で使っている女中ほどにも、彼等の首ねっこを取り押さえる権利とてない存在となったのである。

バーバラは、ハッター家の総領娘であったが、エミリーのはねっ返りの血をひいたきょうだいの中では、まずまず、これがいちばんまともな人間に近かった。三十六歳の老嬢で、背の高い、痩せた、薄い金髪女であるが、この娘だけは、母親からもらって飲んだ乳が腐っていなかったわけである。うまれつき、生きものに対する豊かな愛情と、自然に対する異常な共感を持っていて、これがほかの連中とはかけ離れた存在にしていた。三人きょうだいのなかでは、この娘ひとりだけが、父親の性質をうけ継いでいたのである。とはいっても、麝香猫が通ったあとと同じことで、これとても、母親の轍を踏む異常性のかおりからのがれることはできなかった。ただ、彼女のばあいは、その異常性が天才と紙一重なのであって、その決潰口が詩に求められていたのである。彼女はすでに当代一流の女流詩人であった。――あるいはアナーキスト詩人とでもいおうか、とにかく文壇では、プロメシュース的精神をもったボヘミアン、天禀の詩才をそなえた才女として賞讃しないものはなかった。憂れたげで賢しげな、緑色の目をした彼女は、才藻燦めく難解な詩集を幾巻か著わしている著者として、ニューヨークの知識人のあいだでは、デルフィの神託を下すアポロのごとき存在になっていた。

バーバラの弟のコンラッドは、生れつき自分の持っている異常性のバランスを埋めるために、姉のような芸術的素質はみじんももっていなかった。この男は、てもなく、おふくろにズボンをはかせたような代物で、典型的なハッター家流の乱暴者であった。三つの大学の不良学生のブラックリストにのせられ、この男バカじゃないかと思われるほどの悪質な、無鉄砲きわまるのらくらぶりを発揮して、そのために次次と黙まわしに退校処分を受けた。契約不履行のかどで、二度まで法廷にはひっぱり出されるし、いちどは小型自動車のむちゃくちゃ運転で

通行人を轢き殺し、このときはあわててておふくろの顧問弁護士たちに糸目をつけぬ金をたんまりつかませて、ようやく事なきをえたのであるが、酒を飲むと、性来の異常な血がカッと頭にのぼり、おとなしいバーテンを相手に、ハッター家家伝の癇癪玉をたたきつけるなどはもう毎度のことで、元気さかんな時分には、自分でも鼻はペチャンコにされる、(これは整形外科医の手で入念に復原されたが)首の骨は折られる、ひっかき傷や打ち身の傷にいたっては、それこそ数えきれないほどであった。

ところが、それほどの男でも、おふくろの金城鉄壁の意志の前には、手も足も出なかったのである。老夫人はむすこの首根っこをひっつかんで、肥溜からひきずり上げると、ジョン・ゴームリーという、実直で分別のある、非の打ちどころのない好青年をこれにあてがい、これといっしょに仕事をさせる段取りをつくった。ところが、これとて、当人を極道三昧から足を洗わせるわけにはいかなかった。いっしょに始めた株式仲買業のやりくりは、ゴームリーの手堅い腕にまかせきりで、奴さんはまたちょい〳〵色町でぶん流すという始末である。

しかし、そうしたコンラッドにも、いくらか正気の時があったものか、さるところで一人の不幸な若い女にめぐりあって、彼はその女と結婚した。もちろん、結婚が狂った生活のブレーキになりはしなかった。妻のマーサは彼とおない年の、おとなしい小柄な女であったが、彼女は日ならずして、自分の不幸の限界をさとった。老婆が万端とりしきっているハッター家に、むりやりに同居をしいられ、夫にはさげすまれ、それこそ無いも同然のあしらいを受けて、元気だった彼女の顔は、みるみる不断のおののきの影を濃くしていった。舅のヨーク・ハッターと同じように、彼女も地獄のなかの亡者の一人になり果てたのである。

哀れなマーサは、猫の目のように気の変りやすいコンラッドとの結婚生活からは、ほとんど何の喜びも期待できなかった。せめて頼みとするのは二人の子供、十三になるジャッキーと四つになるビリーであったが、これとても真の幸福とはならなかった。それというのが、ジャッキーは手のつけられないやんちゃ坊主の強情っぱりで、そのうえ妙にませた子で、悪知恵がはたらき、なにか残忍なことを思いつくと天才的なひらめきを発揮するという、まったく手に負えない子供で、母親のみならず、伯母たちや祖父母たちまでが、しじゅう苦労の種にしていた。兄がそんなふうだから、弟のビリーまでがその真似をする。そんなわけで、事志とたがったマーサの敗北生活は、ひたすら、この二人の子供を破滅から救うための、不撓の戦いと化したのである。

さて末娘のジルはというと、……バーバラがこんなことを言っている。「あの娘は、いつまでたってもおぼこ気の抜けない娘よ。人をあっといわせる、ただそれだけで生きてるのね。まあ、あたしの知ってるなかでは、ジルなんか一ばんの悪女だわね。——だいいち、あの美しい唇と色っぽい姿態で誓った約束を、さっぱり果さないんだもの。二重に罪が深いわよ」ジルは二十五歳であった。「あの娘は魔力をもたないカリプソよ。骨の髄までさもしい人間だわ」ジルはあまたの男たちを実験していた。そして、いつも口癖のように、「人生は大文字ではじまるのよ。ご馳走はたらふく食べなくちゃ」といっていた。要するに、このジルは、おふくろのりっぱな縮刷版であった。

*

磐石のごとき剛悍な妖婆をタテ役者として、自殺にまで追いつめられた見る影もない小男のヨーク、才女バーバラ、極道むすこのコンラッド、はねっ返りの不良娘ジル、おど〳〵びくびく怯け上がっているマーサ、それに二人の不幸な子供たち——と、こう役者がそろっていれば、これだけでもう、ここの家のキ印ぶりは申し分ないと、だれしも言うだろう。ところが、さにあらず、この上にもう一人いるのである。これがまたただのしろものではない。えらく悲劇的な、悲惨この上なしという人物で、これの前に出たら、他の連中の奇行などはたちどころに生彩を失って、なんの変哲もないものになってしまう、というくらいのものである。

これがルイザだった。

この女、自分でルイザ・キャンビオンと名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com